

日本語研究報告

語彙、文法、文化の観点から その二

一、はじめに

本発表は語彙、文法、文化という三つの観点から日本語を研究したものである。まずは、外来語の氾濫現象に着眼し、その現象にどう対処すればいいかを究明した。次に、川端康成の『雪国』の冒頭の一文を引用し、原文と英語訳文を比較・分析することによって日本語が述語中心の構造を持っている言語であることを解明した。最後に、文化におけるコミュニケーションの視点から文法外コミュニケーションのルールを考えながら如何にして日本人とコミュニケーションすることができるかを討究した。

二、語彙 ―外来語について―

周知のように、日本語は和語、漢語、外来語、混種語という四つの語種に分けられる¹。日本語語彙形成の歴史から考えれば、外国語を日本の言葉に取り入れて使用する、という「借用」の特性を日本語は持っている。樺島忠夫氏は『日本語はどう変わるか：語彙と文字』（岩波書店、1981年）において、日本語語彙の形成における「借用」の特性を詳細に論じている。こうした「借用」の特性によって、日本はより速く外国語を導入するだけでなく、それと同時に外国の文化・文明を摂取することができると考えられる。しかし、その反面、現代では外来語（片仮名）の使用が増えれば増えるほど、それによって日本語語彙の「乱れ」がもたらされ、さらに文化的には日本文化は外来文化に圧倒されるという外来語の文化的占領の事態になる恐れがあると樺島氏は懸念を表している²。「借用」の意味からすれば、四世紀頃日本に伝来してきた中国語も借用された外来の言葉だといえよう。しかし、時が経つにしたがい、日本人は漢語を一つの外来の言葉と見なすより、むしろ日本語の一部として受け入れているのである。それにもかかわらず、外来語の氾濫は外来語（カタカナ語）が漢語に取って代わるという日本語の外来語化の傾向を表し、しかも外来

1日本語語種の説明については、拙稿「日本語研究報告：語彙、文法、文化の観点から」（『北商外語研究集刊2』所収、文鶴出版、2012年、201-212頁）を参照されたい。

2近年、日本語の「乱れ」現象に注目し、様々な視点からそれを討究した論著は少なくないように思われる。たとえば、雑誌『言語』（大修館書店、2002年8月）は特集として色々な角度から日本語の乱れを分析している。管見では、インターネットの普及による情報交換の発達、言葉の「乱れ」に拍車をかけた一つの要因だと考えられる。その例としては、台湾の若者の間では流行っている「火星文」、すなわち大変簡略された文字が挙げられる。したがって、グローバル化が随分進んでいる現代では、言葉の「乱れ」を有する言語は日本語のみならず、ほかの言語も言葉の「乱れ」問題に直面しているといわざるをえない。つまり、言葉の「乱れ」現象は現在世界各国の言語問題だといえよう。ただし、樺島氏が指摘するように、日本語特性としての「借用」と、言葉を整理・統一しようとせず、なるにまかせるという日本人の言葉に対する態度とによって、日本語語彙の「乱れ」現象は他の言語より深刻になっているのではなかろうかと考えられる。

語を取り入れることによって日本語語彙の増加につながる。したがって、漢語と共に外来語をも多く覚えなければならないということを日本語学習者は留意すべきである³。

実際、外来語の氾濫という議題をめぐって賛否両方はそれぞれのスタンスに立脚し、議論を白熱に交わしている。こうした賛否両論を石綿俊雄氏は『日本語のなかの外国語』（岩波書店、1985年）において子細に紹介している。外来語の使用を肯定的に捉えている論者は、そもそも日本語には外国語を摂取してそれを日本語化するという同化力があるため、外来語をより多く使用することはただ日本語の特性の現れにすぎない。したがって、外来語の使用は日本語を破壊するものではない、と考えている。こうした賛成論に反して、反対論の方は比較的に多く、六つの批判の論点を取り上げている。それは、外来語の急激な増加と、和語・漢語で十分表現できるのにわざわざ外来語を使用することと、コミュニケーションに支障をもたらしたことと、外来語の意味用法が英語などの原語とずれていることと、日本語の伝統を破壊することと、外来語における造語力の欠如と区別できない同音語の発生という言語構造上の欠点とである。たとえ石綿氏はなるべく中立な立場で客観的に賛否両論を紹介すると言っても、以上のそれぞれの論点をみれば、明らかに賛成論より否定論の方がより説得力を持っているように思われる。

いずれにしても、もし新しく取り入れた外来語と以前からある言葉とを整理・統一せずに、なるにまかせるという日本語語彙の特性に対する樺島氏の指摘⁴が首肯できるとすれば、今後日本語語彙における外来語の氾濫をめぐる議論は引き続き戦わされるであろうが、日本語は世界の潮流に合わせながら、自らバランスよく語彙の乱れを修正していくのではなかろうかと考えられる。

三、文法 ―述語中心の構造―

日本語には主語がないとよく言われている。その最も代表的な例文として、川端康成の『雪国』の冒頭の「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」という主語のない文が取りあげられる。よくこの一文を読めば、トンネルを抜けるのは何かが書かれていない、ということは分かる。つまり、これは主語がない文といえよう。日本語には主語がないという傾向があるといえるが、しかし、日本語は主語がいらないとまで断言できるという主張にはやはり不安を抱かずにはいられない⁵。たしかに日本語では主語のない文はいくらでも取りあげられるが、それによって日本語は主語がいらないということを論断するより、

3たとえば、日本語（和語、漢語）の単語を覚える際に、同じ意味の外来語をも覚えなければならない。具体的な例を挙げれば、牛乳－ミルク（milk）や自動車－カー（car）などである。

4樺島忠夫『日本語はどう変わるか：語彙と文字』（岩波書店、1981年）、161頁、参照。

5日本語に主語はいらないと唱えている代表的な論者は金谷武洋氏である。金谷氏は『日本語に主語はいらない』（講談社、2002年）、『日本語文法の謎を解く：「ある」日本語と「する」英語』（筑摩書房、2003年）において、詳らかに主語がない例文を挙げながら、日本語は主語がいらないという論理を展開している。英語が主語・述語二本立ての構造なのに対して、日本語は述語一本立ての構造である。したがって、主語がない日本語は英語の文法に合わせる必要がなく、むしろ新たな日本語文法を構築すべきだ、と論じている。

むしろ日本語が述語中心の言葉なので主語のない場合はよくある、という論点を際立たせればいいのではなかろうかと思われる。

中村明氏は『日本語案内』（筑摩書房、2000年、192-193頁）において日本語文法を論ずるとき、述語中心を一つの独特の表現として取り上げている。彼の説明によれば、日本語の文は述語を中心に展開し、その述語の核となる言葉の品詞によって「花が咲く」というような動詞述語文、「山が高い」というような形容詞述語文、「鯨は哺乳類だ」というような名詞述語文に三分する、とされる。

こうした述語中心の特徴に注目した中島文雄氏は『日本語の構造：英語との対比』（岩波書店、1987年）において日本語を英語に対比することによって英語を主語中心の「命題文」と、日本語を述語中心の「描写文」と捉えており、先述の『雪国』の例文とその英語訳文を次のように引用している。

「国境のないトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。」

The train came out of the long tunnel into the snow country. The earth lay white under the night sky. The train pulled up at a signal stop. (E. G. Seidensticker 訳)

原文の第一文だけをみれば、トンネルを抜けるのは何かは分からないのである。そのため、主語がないことは明らかである。しかし、この文を主語と述語の構造からなる英語に訳そうとするなら、主語が欠かせないため、英訳は主語を **train** としなければならない。もちろん、原文の第三文によれば、主語が汽車であることは推測できるが、ただ「国境のないトンネルを抜けると雪国であった」という文句だけでは、主語がないので正しく英語に訳することは難しいといわざるをえない。したがって、訳者は第三文にでてきた「汽車」をみて主語を決めたのではなかろうかと思われる。おもしろいことに、もしその英語の訳文をさらに日本語に直訳すると、次のように原文と全く異なった日本語になる。

汽車は長いトンネルを出て雪国へ入った。地面は夜空のもと白く横たわっていた。汽車は信号所で止まった。

訳文は日本語としては文法が間違っていないが、原文と較べれば日本語の表現がすでに変わっているように思われる。何故にこうした表現の差異が起こるかについて、中島氏は次のように説明している。

日本語では、散文でも和歌と同じように具体的な場面や感情に即した表現法をとり、英語のように題目となる主語を立て、主語が全文を支配するという表現をとらない。

「雪国」の冒頭の文について、汽車という主語が表出されていないと述べたが、実は汽車は問題にされておらず、ただトンネルを出ると景色が変わったことを描写してい

るのである。はじめから主語は考えられていないのである⁶。

まさに中島氏の指摘の通り、雪国の景色を描出しようとするとき、主語が最初から考えられていないので、「国境のない長いトンネルを抜けると雪国であった」というような述語中心の描写文となったのである。

また、金谷武洋氏は『日本語は亡びない』（筑摩書房、2010年、73-75頁）において、この『雪国』の冒頭の和文とその英訳を比較・分析し、英語と日本語の認知的な差を指摘している。結論からいえば、原作の視点が汽車の中にあるため、読者は作者の視点と同じく汽車に乗っているようにトンネルを抜けて目の前に雪国の景色が広がっている。英訳の視点が汽車の中からではなく、汽車の外であるため、訳文から思い浮かぶ情景は上方から見下ろした角度でトンネルを抜けている列車のイメージである。つまり、時間と空間を立体的に表現する和文に比すれば、英文の方は主語の汽車を中心に描かれたという表現になる。

四、文化 —コミュニケーションについて—

前節では主語—述語という英語の文法構造と比較することによって、主語の影が非常に薄く時には主語がないほどの、述語中心という日本語の文法構造を明らかにしてきた。日本語を身につけようと思うなら、語彙を大量に暗記し、さらに文法を正確に理解するのはいうまでもなく非常に重要なことであるが、しかし、単に語彙と文法を習得しただけでは、恐らく日本人との会話が順調にいかない場合はしばしば起こるであろう。なぜなら、社会言語学の解釈からみれば、文化に対する正確な認識の欠如は文法外のコミュニケーションに支障をもたらすからである。

J. V. ネウソトプニー氏は『外国人とのコミュニケーション』（岩波書店、1982年、40-56頁）において人間の社会・文化行動を人間の相互伝達を目的にするあらゆる行動、すなわちコミュニケーション行動と、それ以外の行動、すなわち実質行動とに分け、さらに彼はコミュニケーション行動を文法外コミュニケーション行動と、シンタク・語彙・発音・文字を含めている言語（文法）行動とに分類している。その説明によれば、文法外コミュニケーション行動が八つの行動ルールとして整理されている。それは以下のようなものである。

1. 点火のルール — 如何なる場合にコミュニケーションを始めるかを決めること。
2. セッティングのルール — 点火のルールによって、コミュニケーションが行われるという決定がされた後に、いつ、どこでコミュニケーションを行うかを決めること。
3. 参加者のルール — だれとコミュニケーションするかを決めること。
4. バラエティのルール — コミュニケーションをする時、その様々なコミュニケーション手段の中からどれを選ぶかを決めること。
5. 内容のルール — いつどこでだれにどうコミュニケーションを行うかを決めると同時に何を伝えるかを決めること。

6中島文雄『日本語の構造：英語との対比』（岩波書店、1987年）、5頁、参照。

6. 形のルール — 具体的な内容は内容ルールで定まるが、一つのメッセージが形として正しいメッセージになる条件は「形のルール」で決まること。
7. 媒体のルール — コミュニケーションを行うためには、音声、文章、身振り手振りなどのような物理的な媒体(コミュニケーションのチャンネルとも呼ばれるもの)が必要だが、その選択や使用を支配すること。
8. 操作のルール — 私たち自身や相手が行ったコミュニケーション行為に対して、様々な評価があったり、それに基づいて、言語行為の訂正が行われたりするという行動。

以上の八つのルール違反を犯せば、コミュニケーション問題が起こると J.V. ネウソトプニー氏は指摘している。コミュニケーション問題の根元はメッセージが通じなかったり、誤解されたりすることというより、むしろ何かを言うべきところで言わなかったり、沈黙を期待された時におしゃべりをしたり、リラックスすべきところでフォーマルな態度をとったり、期待されたときに挨拶をしなかったり、また不適當に笑うような行動をとったりすることである。

したがって、こうした文法外のコミュニケーションのルールを守るためには、日本人の文化をよく理解しなければならないのである。

五、おわりに

以上、語彙における外来語の氾濫、文法における日本語の述語中心の構造、文化におけるコミュニケーションをみてきた。結論からいえば、次のようである。第一に、中国語を母語とする日本語学習者は、語彙を習うとき、暗記する単語の数が多ければ多いほどよいというわけではなく、外来語の氾濫現象をよくふまえて無闇に外来語をすべて覚えるより、まずは基本的で重要な外来語から覚えた方がいいであろう。第二に、日本語の述語中心の構造をよく弁えて日本語らしい日本語を書いたり話したりすることができるように努力すべきである。第三に、その目標を達成するには、ただ単語と文法を身につけるだけではなく、さらに文法外のコミュニケーションのルールをよく理解しなければならないのである。